

ディーラーがカードを配るなか、僕はこっそりリリエールに声をかける。

「……ねえ必勝法ってなに？」

「私は生まれてこのかたギャンブルなんてしたことないけれど——勝ち方は分かるわ。かけ金を倍々にしていけばいいの。そうすればいつかは所持金がプラスになるわ。これがギャンブルの必勝法」

まるでそれが自分のみぞ知る真実とばかりに得意げな表情で机上きじょうの空論くうろんを語るリリエールちゃん。可愛いかわいい。

「……ねえカジノに来たことあるの？」

「もちろん今回が初めてよ」

「ポーカーは」

「もちろん今回が初めてよ」

「……………」

無謀だ……。

無謀を通り越してもはやただの馬鹿だ……。

うづうづ……これもうダメだ……ごせんまんが消える未来しか見えない……。

○

「フルハウス」「フルハウス」「スリーカード」「ツーパーペア」「ツーパーペア」「スリーカード」「フルハウス」「スリーカード」「フルハウス」「ワンペア」「フルハウス」「フルハウス」「ツーパーペア」

非現実な勝ち方から、堅実な勝ち方けんじつに変わりつつあるように思えた。

変だった。

どこことなく違和感が渦巻うずまいていて、けれど違和感の正体を僕は言葉にできずにいた。

そして最も妙なのは、イレイナの表情だった。

「……………」

彼女は自らが積み上げたチップの山と、リリエールの膝ひざの上にあるバッグを見比べていた。悩ましげに眉まゆを八の字にしながら。

いったい何を考えているのか――。

「どうしたのかしらイレイナさん。だんだんと手が弱まっ

てきているわね」

「……挑発のつもりですか？」

「事実を述べているの」

「……べつに、何でもありません。あなたの資金の残りを心配して差し上げているんです」

「ふうん——」

安い挑発ちようはつの応酬おうしゆうの最中にも、二人はチップをテーブルに置き、ディーラーはカードを配る。

イレイナは自らのカード二枚を確認すると同時に、チップの山から一部だけ取り出して、「ベット」とテーブルの中央に添える。

リリエールは「コール」とイレイナと同じ数のチップを

添えた。カードは見えてない。見るよ。

気が付けば二人の抱えるチップの数は同等にまでなっていた。といつてもリリエールは所持金から切り崩したただけであり、僕や他の客から根こそぎ奪つていったチップによつて積み上げられた山とは重みがまるで違ふけれど。

二人がチップを置いたことで、テーブルに三枚のカードが並べられる。

手元に配られた二枚とテーブルの三枚で自分の手の良し悪しを見極めるのがポーカーの第一ラウンドである『フロップ』だ。テーブルに四枚目が置かれる『ターン』と、五枚目が置かれる『リバー』まで進むためには先ほどの二人のように同額のチップをかけ続けるか、もしくは全員が一

枚もかけなければいい。

互いの手札を開く『ショーダウン』が行われるのは、勝負の最後。それまでは自分の手が相手よりも強いのか、弱いけど相手を蹴落とすために虚勢きよせいを張って高額ベットするのすなおか、素直に降りるのか、この勝負は続けても勝つ見込みがあるのかをひたすら考え続ける。金を投じながら、こうした心の読み合いのうえで、最後までかけ続けた者、もしくは最後の最後で勝った者が、テーブル上のチップをすべて奪える。

ポーカーは一見して単純そうなルールの裏にプレイヤー同士に複雑おもわくな思惑こころざしが交錯するから初級者には向かないのだ。リリエールとの勝負を始めた直後のイレイナはかなり強

気だった。毎回のようにショーダウンまで持ち込み、当然のようにフルハウスもしくはロイヤルストレートフラッシュで上がる。そしてチップをいただく。

けれど今は見る影もなく、

「……ベット」

と、申し分程度のチップを重ねて置くだけ。

かなり弱気になっていた。

「ふふ——レイズ」

対してリリエールはあり得ないくらいに強気だった。

ちなみにベットに対するコールは、同額かけることを意味していて、レイズは、それ以上のチップをかけること。

リリエールはチップの山を全部そのままテーブルに置い

た。

「……………」

金の力でイレイナを黙らせていた。

この圧倒的な自信の強さという点では、二人のプレイスタイルは非常に似通っている。

イレイナがもんどうむよう問答無用でぶん殴るプレイスタイルならば、リリエールはさつたば札束で顔をひっぱたくプレイスタイルだろう。

……………。

何を言ってるのか自分でもよくわかんなかった。

「……………さあどうしたのイレイナさん。降りるの？ それともまだ続ける？ ちなみに私の手は相当強いわよ。現時点で既に私の勝利は見えているわ」

うそつけ自分の手札見てないじゃん。

毎回僕に「ねえ、これって役できってる?」「ってショーダ
ウンになつてから確認してくるじゃん。そして毎回惨敗し
てるじゃん。」

「……………」

しかしレイナはまたも苦しげな表情を浮かべるのだっ
た。

何かを深く深く考え続けているというか——見ように
よつては単に体調が悪そうにも見えた。